

政務活動報告書

1. 政務活動名「東日本大震災からの復興について・岩手県山田町視察研修」

11月28日(金)

視察先 岩手県下関郡山田町八幡町3番20号
山田町役場

2. 政務活動内容

○山田町の沿革

山田町は陸中海岸のほぼ中央に位置し、山田湾と船越湾の二つの湾を擁しています。その沖合では親潮と黒潮が交差し、世界でも有数の漁場です。豊かな漁業資源に恵まれた海産物は、殻付きカキ、イカ、アワビ、ウニ、ホタテ、ワカメ、サケなどをはじめとして、海の四季折々を感じる味覚に満ち満ちています。

船越半島は、壁岩・磯・赤松など海岸性原生自然の景観に優れ学術的にも価値が高く、本州に残された最後の秘境ともいわれ、昭和

30年には国立公園に指定されています。その素晴らしい景観に恵まれた三陸の大地は有史以来幾度となく大災害に見舞われ、中でも大津波を幾度も経験し、その都度町は大きな痛手を負いながらも再建されてきました。

歴史的には、1643年にオランダ船ブレスケンス号が山田湾に入港。水、食料、野菜を補給するために入港した船員に町の人々は温かいもてなしをしました。それがきっかけで350年を経た平成5年にオランダ王国との文化交流が始まりました。ユース年代を迎えてのサッカー交流や、オーケストラの公演など、まさにヨーロッパの香りが届けられているのです。そのような史実により山田湾内に浮かぶ島をオランダ島と命名しています。

○山田町の地勢

山田町は人口約1万5,000人の町です。面積は、約263km²。平地部は極めて少なく、大半を山林原野が占めています。

沿岸はリアス海岸特有の地形を有し、ブナやスギなどの森林に覆われた船越半島を挟んで、北側に山田湾、南側に船越湾が広がっています。

年間の平均気温は11.6℃、降水量は約1,585mm（いずれも過去5年分の平年値）。沖合で寒流の親潮と暖流の黒潮などが混じり合い、西方を縦走する北上山地の影響を受けるため、県内陸部と比べ降雪量が少なく冬は比較的暖かいのが特徴です。

夏になると、海側から湿潤で冷たい北東風「やませ」が吹き込むことがたびたびあり、山田湾にはやませによる海霧が幻想的に漂います。



○山田町の四季

海と森に囲まれた自然豊かな景観周囲約20kmの山田湾は、湾口が狭くつぼんだきんちやく型で「海の十和田湖」と形容されるほど穏やかに凪ぐことが多い地形であり、湾内には関口川や織笠川などの河川から山間部で蓄えられたミネラル分が注ぎ込まれ、ウニやカキ、ホタテガイなどの格好の養殖場になっています。

恵み豊かな陸中の海を象徴するように、湾内には多くの養殖いかだが並んでいます。

近年では波の静かな特徴を活かして、シーカヤックやサップなどマリンスポーツの舞台としても脚光を浴びています。

内陸部では農業も広く行われ、水稻を中心に多種の野菜類を生産。肥えた土と昼夜の寒暖差が味の良い農作物を育てています。

また、シイタケの原木栽培が盛んで、干ししいたけの品質の良さは全国的に高い評価を受けており、ほかにも県内有数のマツタケ産地としても知られています。

○山田町の被災状況

山田町は過去の災害から学び、津波により甚大な被害に遭った地区では集団で高台移転するなど、それぞれ対策を行ってきました。更に防潮堤を設置するなど、さまざまな防災対策を講じてきました。

平成23年3月11日の「東日本大震災」では、三陸海岸一帯に防潮堤を越える規模の大津波が押し寄せ、大きな被害をもたらしました。山田町での最大震度は5強、町を襲った最大級の津波第1波は、波高約19mと記録されています。

黒いカーテンのような高い波が押し寄せ、襲いかかるように町に海水が流れ込みました。家と家とがバリバリという音を立ててぶつかり合い、海へ引き込まれていきます。避難途中の人々にも波ががれきを巻き込みながら押し寄せ、流された車からはクラクションの音が鳴り響いていました。そこには津波の水流に逆らうことのできない地獄絵図が町内各地で広がっていました。津波や火災による人的被害は、死亡者数および行方不明者数が合計825人。町人口（平成23年3月1日時点での1万9,270人）の約4.3%に及びました。家屋被害は、全壊2,762棟、大規模半壊・半壊405棟、一部損壊202棟にのぼります。

低標高の沖積平野などに立地した家屋が津波による浸水で面的に広く被害を受けたほか、津波を原因とする大規模な火災の発生により、浸水域以外の家屋も焼失しました。

町の基幹産業である漁業関係では、震災前（平成22年3月）の登録漁船1,992隻のうちほぼ9割に当たる1,791隻の船が流失し、養殖施設や作業小屋のほとんどが壊滅的な被害を受けました。多くの町民を亡くし、焼け野原になった光景からは、今日の町の姿は想像もつきませんでした。



○東日本大震災からの復興計画・現況

～10カ年の復興ステップ重ね「コンパクト」なまちづくり～

「二度と津波による犠牲者を出さない」を理念に、何よりも津波から命を守る町づくりを目指し、復興に向け歩を進めてきました。

平成23年12月に策定した「山田町復興計画」では、10カ年の復興ステップを「まちづくりの基礎となる土地や基盤施設の再整備と各種活動を始動する『復旧期』」、「新たな土地への建設開始と各種活動を本格始動する『再生期』」、「町の成熟化と広域的な連携による各種活動を拡大する『発展期』」をおおむね3カ年ずつの間隔で設定。段階に応じた施策や事業を展開してきました。



復興計画での都市の骨格形成（まちの空間イメージ）で目指したのは、既存市街地・集落を基本にした「コンパクト」なまちづくりです。宅地整備は、既存集落とできるだけ隣接する形で高台団地や災害公営住宅を整備し、従来の地域コミュニティのつながりを重視しました。町中心部は、現在の三陸鉄道リアス線・陸中山田駅周辺と国道45号に挟まれたエリアを「まちなか再生区域」と位置づけ、震災前は広範囲に分散していた商店や図書館、郵便局や銀行などを集約。災害公営住宅（146戸）も隣接させ、利便性を確保しています。

○政務活動成果

本町にもこれまでいくつかの小規模な災害が発生していましたが、今後起こりうる災害の例として天の川氾濫を考えた際に、避難場所に指定する箇所が水没してしまう恐れがあることから、ハザードマップを参考に今一度見直さなければならない状態にあると考えます。

また、大規模災害が発生し、長期に渡り避難生活が強いられた際の様々な問題が起こりうる例を鑑みながら訓練が必要と考えます。

まずは自助の部分をしっかり訓練し、共助・公助と町民全体にその必要性をしっかり伝えなければならないと考えます。

政務活動報告書

1. 政務活動名「岩手県洋野町北三陸ファクトリー視察研修～うに再生養殖の取り組み～」

11月29日(土)

視察先 岩手県九戸郡洋野町種市第22-133-1
株式会社 北三陸ファクトリー

2. 政務活動内容

○洋野町の沿革

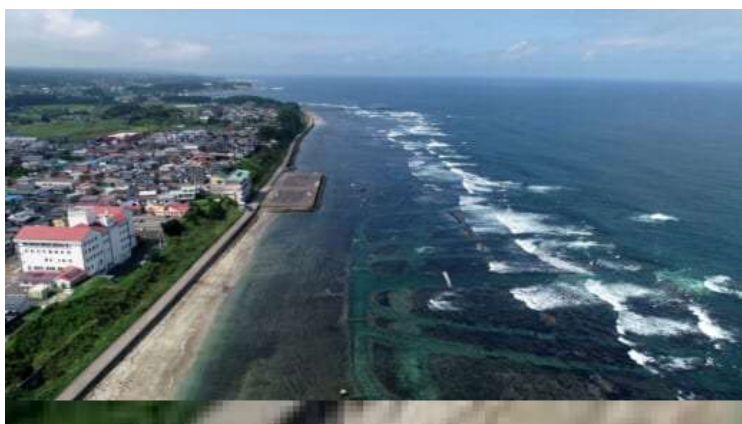
岩手県洋野町は2006年（平成18年）1月1日に九戸郡種市町と大野村が合併して誕生しました。現在の洋野町は、東北地方の岩手県沿岸部最北端に位置し、九戸郡に属しています。

縄文時代の多くの遺跡から土器や石器が発見されており、この地域で人々が生活していたことが分かっています。東日本大震災の復興事業に伴う発掘調査では、太平洋側では初めて環状列石が出土した遺跡もあります。

中世には糠部郡に属し、古くから馬の産地として知られていました。

江戸時代 1664年（寛文4年）に八戸藩が創設された際、洋野町がある地域は八戸藩領となりました。当時、日払い処と呼ばれる鉄山の事務所が置かれ、鉄の鑄造業や運送業、炭焼き産業が栄えました。

洋野町の種市地区は「南部もぐり」発祥の地として知られています。明治時代に貨客船「名護屋丸」が座礁した際、解体引き揚げのために呼ばれた潜水夫の一人が、地元の磯崎定吉にヘルメット式潜水の技術を教えました。磯崎定吉は後に「南部もぐりの祖」と呼ばれ、この技術を確立し、多くの後継者を育てました。現在、県立種市高等学校には全国でも唯一の潜水土養成課程があり、多くの卒業生が海洋開発の分野で活躍しています。



○洋野町の地勢

洋野町は岩手県の北東部に位置し、東は太平洋に面しています。海岸線は約20kmにわたって続いており、美しい海岸景観が特徴です。

海岸沿いである東側は太平洋を望む「北上山地」の北部に位置し、海岸部は海食崖や岩礁が発達し、段丘地形がみられます。

内陸部である西部は標高200mから500mのなだらかな「丘陵地帯」が広がり、酪農や畑作が盛んです。

洋野町には高い山はありませんが、町の中央を「高家川」が東へ流れ、太平洋に注いでいます。そのほかにも「有家川」など、いくつかの小規模な河川があります。



○洋野町の四季

洋野町の春はまだ少し肌寒さが残りますが、少しずつ暖かさが増していく季節です。

冬の間は静かだった町に緑が戻り始め、木々は芽吹きフキノトウや山菜が顔を出し始めます。また、海ではワカメやコンブなどの海藻が採れ始め、漁業も活発になり春の訪れを感じさせます。

夏は太平洋からの涼しい風が心地よく、過ごしやすのが特徴です。

たくさんの人々が海水浴やマリンスポーツを楽しむために訪れます。また、豊富な海の幸が水揚げされることで新鮮な魚介類を味わうことができます。

秋は実りの季節です。山ではキノコや木の実が採れ、豊かな山の恵みを楽しむことができます。紅葉が美しく、散策を楽しむ人々で賑わいます。また、海では定置網漁が最盛期を迎え、サケやイカなどが水揚げされ、新鮮な魚介を使った郷土料理が食卓を彩ります。

冬は厳しい寒さもありますが、美しい雪景色が広がる季節です。

白い雪が降り積もり、町全体が静寂に包まれますが、海岸線には荒波が打ち寄せる雄大な景色が広がります。また、寒さで身が締まった海の幸は特に美味しく、アンコウやタラが旬を迎えます。



○北三陸ファクトリー

北三陸ファクトリーは岩手県洋野町に拠点を置く水産ベンチャー企業です。洋野町の特産品であるウニを軸に、海と地域の活性化を目指して事業を展開しています。

北三陸ファクトリーの最大の特徴は、「洋野町うに牧場」で育てられた高品質な「四年うに」を販売していることです。

「洋野町うに牧場」とは、洋野町に昔から伝わる独自の漁業の知恵を元にしてしています。1970年代ごろ、洋野町の漁師たちはウニやアワビの餌となる海藻を守るため、海岸沿いの岩盤に溝を掘りました。この溝に沖から流れてきた昆布やワカメといった天然の海藻が自然にたまり、豊かに育つ仕組みになっています。ウニは海藻を餌に成長するため、豊富な海藻があることで質の良いウニが育ちます。うに牧場で上質な海藻



をたっぷりと食べて育てたウニは、旨味も実入りも良く、高品質な「四年うに」として安定的に生産されています。

これまでの「三陸産」という広範なカテゴリでは、洋野町産のウニの価値が埋もれてしまうという課題がありました。そこで、ロゴマークやデザインを取り入れ、洋野町産の高品質なウニを「北三陸ファクトリー」のブランドとして明確に打ち出し、世界へ発信することを目指しています。

そして北三陸ファクトリーの大きな目標の一つとして、「北三陸から世界の海を豊かにする」ことを目標にしています。

環境問題への取り組みとして、地球温暖化による海水温の上昇や「磯焼け」は、ウニの漁獲量減少の主な原因となっています。北三陸ファクトリーは、この磯焼け問題の解決にも力を入れており、堆肥ブロックの製造や藻場再生の取り組みを通じて海の豊かさを守り、持続可能な水産業の実現を目指しています。この取り組みは「ウニ再生養殖システム」として注目されています。また、日本国内にとどまらず、グローバルな展開も積極的に行っています。2023年4月には、オーストラリアに現地法人「KSF Australia Pty Ltd.」を設立し、今後うに再生養殖のノウハウを世界に広げていく事を計画しています。

また、地域と積極的に連携し、地域の未来への貢献として地域産業の創出や雇用の促進にも貢献しています。



○政務活動成果

北三陸ファクトリーでの藻場再生の取り組みは元々積丹町での取り組みを参考にして始まったものです。今般地球環境の変化により海水温が上昇することによる漁獲内容の変化や、磯焼けによるウニやアワビの漁獲量減少は喫緊の課題となっており、具体的な取り組みとして「ウニ再生養殖システム」を参考にするべきであると考えます。このような事業により、地域ブランドの確立、地域からの雇用の促進、そして漁業で暮らせる町となり得るのではないかと考えます。